# 序

本号は，昨年 3 月に選択定年で退職された下村裕先生，ならびに本年 3 月をも定年を迎えられる横山千晶先生，安田淳先生，笠井裕之先生，計四先生の退職記念号である。長きにわたって法学部日吉所属の同僚として四先生とご一緒させていただいた我が身としては寂しい限りであるが，ここにあらためて各先生の足跡を振り返り，本号の序としたい。

下村先生は，東京大学理学部で物理学を専攻され，1991 年に塾法学部に着任されて以来，日吉の物理学教育の中心として活躍される傍ら，慶應義塾志木高等学校長，法学部日吉主任等の重職も歴任された。流体力学や剛体力学分野，とりわけ乱流の統計理論がご専門で，回転や壁を有する流れにも応用可能な乱流モデルの開発に従事された。ケンブリッジ大学の H.K. Moffatt 教授と「回転するゆで卵は，なぜ重心を上昇させて安定して立ち上がるのか」を解き明かし，論文は *Nature* に掲載された。ゆで卵が回転しながら立ち上がる間に小刻みにジャンプをしているという信じがたい現象も解明され，これらをまとめた『ケンブリッジの卵――回る卵はなぜ立ち上がりジャンプするのか』をはじめとする，回転卵運動をめぐる一連の力学的研究の功績により，平成 20 年度に義塾賞を受賞されている。

塾文学部英米文学専攻のゼミの先輩であり，職場の先輩でもある横山先生とのお付き合いは，既に 40 年以上に及ぶ。筆者の前年の 1989 年に着任されて以来，英語のインテンシブコースから通信教育部の授業まで数多くの種類の授業を担当され，熱い英語ドラマの授業で知られる先生は，教養研究センター所長，日吉メディアセンター所長等の要職も歴任された。学生時代からウィリアム・モリスを研究されてきた先生は，数多くの翻訳を手がけられたほか，アー

ツアンドクラフツ運動を起点とするヴィクトリア朝の文化と社会の研究，さらには身体知や公共芸術論へと研究領域を広げ，社会の変化とご自身の関心を結びつけながら常に新たなテーマに挑戦されてきた。その軌跡は，『コミュニティと芸術――パンデミック時代に考える創造力』のようなご著書からもうかがうことができよう。

安田先生は，塾法学部政治学科のご出身で，1995 年に着任されて以来，中国語部会の業務を一貫して主導され，中国語履修希望者が急激に増加するなか，インテンシブコースの設立をはじめとする法学部の中国語教育の充実に努めてこられた。日吉 ITC（現日吉 KIC）所長等の要職を歴任されたほか，学習指導主任として日吉の学習環境整備に貢献されるとともに，学部横断的組織である日吉中国語部会の幹事としても中国語教育の発展にご尽力いただいた。現代中国の軍事・安全保障問題の専門家として数多くの研究業績を上げてこられた先生は，近年では人工知能の発達による戦争形態の変容をいち早く著した『知能化戦争――中国軍人が観る「人に優しい」新たな戦争』を監訳された。また，長年にわたり取り組んでこられた朝鮮戦争研究の集大成を近々刊行される予定とうかがっている。

笠井先生は，実は塾法学部政治学科の卒業生であるが，文学への思いがやまず，朝吹三吉先生との出会いもあり，その後はフランス文学研究の道を歩まれることになった。1994 年に法学部に着任されてからは，学部長補佐などの要職を歴任されるとともに，法学部のフランス語の統一教科書『Zoom !』『Zoom ! 2』を編纂されるなど，フランス語教育に力を注いでこられた。また，詩の創作をテーマとするユニークな授業でも知られ，教え子から現代詩の分野で活躍する詩人も輩出している。『三田文學』の伝統を受け継ぐ先生のご専門は，ジャン・コクトーで，本塾図書館所蔵の戯曲『地獄の機械』のタイプ原稿に基づく同作品テクストの生成研究は世界的に高く評価されている。また，本塾出身の詩人・美術批評家の瀧口修造と画家のジュアン・ミロの往復書簡集も刊行されるご予定である。

横山先生のご退職で，とうとう筆者は日吉の一番の古株となってしまう。そのような日がやってくるなど，以前は想像すらできなかった。現に，これらの

先生方のご退職も，個人的にはまだ実感がわかないのが正直なところであるが，ここで一区切りを迎えられるにあたり，今後の様々なご計画をお持ちのことと拝察する。長年のご功労に対して，改めて深く御礼申し上げるとともに，貴重なご研究のさらなるご発展と充実した第二の人生を心からお祈り申し上げる次第である。

2026 年 2 月

法学部日吉主任　鈴木　透